

「神の度量」(マタイ二〇・一〜一六)

1 天の国のたとえ

今日の箇所ではイエスは、ぶどう園のある出来事を、一つのたとえとして用い、神の国について、神について語っています。

天の国は次のようにたとえられる。ある家の主人が、ぶどう園で働く労働者を雇うために、夜明けに出かけて行った(一節)。

「天の国は次のようにたとえられる」とあります。この「たとえられる」という言葉は、似ている、という意味です。天の国(神の国といってもよい)、それは、ぶどう園の労働者を雇うために夜明けに出かけて行った「ある家の主人」に似ている、その主人のようだというのです。

天の国、あるいは神の国、端的に神を、この地上で、直接これだということとは私どもにはできません。ここに時計があるとか、あそこに一本の松の木がある、あれですよ、というようにいうことはできません。何かにたとえて、何かに託して、それによって指し示す、暗示するしかないのです。とはいってもそうした説明の仕方は不確かだっているではありません。むしろたとえていう場合のほうが、身につまされるように分かることが多いのです。たいてい人が毎日の生活で見聞きすること、経験することが材料となっています。

ぶどう園を経営するある人、主人、彼は朝早くから労働者を求めて出かけていきます。人を雇うのが彼の仕事、責任です。ぶどうの収穫期で、一時的とはいえ、大勢の労働者が必要としました。主人は「夜明けに」出かけていき何人かを雇い、農場に送り込みます。彼らに約束した報酬は一日一デナリオン。労働力はこれだけでは足りなかったと見え、九時ごろに行つて雇い、さらに一二時、午後三時に雇い、午後五時にも、おそらく労働時間としてあと一時間ぐらいしかないのに雇っています。この五時に雇われた者たちは主人とのやりとりの中で、「なぜ、何もしないで一日中ここに立っているのか」と聞かれ、「だれも雇ってくれないのです」といつています。これを見ると、雇われるのを待っていたのです。何もしていないわけではない。人が次々に職にありついでいくのを尻目に、雇われないまま、雇われるのを待って、待ちつづけ、いまの時間になつてしまったといっています。

ここまでは話の前半です。夕方六時になりました。仕事が終わるその日の賃金の支払いが始まります。ここでちよつと気になる指示がオーナーからぶどう園の監督に出されます。支払いの順番を雇われた順番ではなく、五時に、つまり最後に雇われた者たちから始めるようにという指示です。後先はともかくみんなに支払うようにというのが主人の意図であったことは間違いないと思えますが、最後に来た者からはじめられるべきだというのはやはり奇妙です。わざわざいわれているのは、当時としても異例なことだったということではないでしょうか。

それはともかく、順番が逆になったという事で結果的に起こったことは、最後に雇われた者がいくらかもらったか、列のうしろに並んでいた、夜明けから働いていた者たちに、知られることになったということ。最初に来た者たちが最初にもらつていけば、最後に雇われた者がいくらかもらったかは、おそらく知らなくても済んだはずですから。

最後に雇われた者たちも一デナリオンをもらった。ここまではしかし、じつは問題はないのです。というのも聖書によれば、この最後に雇われた者たちと主人は報酬・賃金の点でとくに約束はしていません。九時に雇われた者に主人は「ふさわしい賃金を払ってやろう」といっていますし、それ以後は「同じ」ようにしたと記されています。しかし五時からの男とは何も契約を交わしていない。ですから一デナリオンであるが、それ以下であるが、問題はない。仮に彼らといくらいくらと決めていたとしても、そんなことはだれも何も知らなかったはず。むしろ最後に来た者が一デナリオンもらったのを見た瞬間、どうして後回しにされるのかいぶかしく思っているか。彼らが一デナリオンなら、彼らよりも何倍も、おそらく十二倍も長く働いたわれわれは、一デナリオンはもらえるかも知れないと。ところが、その彼らも一デナリオンであった。その時最初から働いていた者たちの不満が爆発したのです。以上がイエスの話しのあらすじです。

2 人のまなざしと神のまなざし

さて天の国、神の国は、ここに語られているような一人の主人とその振る舞いに似ている、それが天の国、神の国の現実だ、それと等しいというのが、このイエスのたとえによる話しの趣旨です。

この話にどこか神の国を指し示すところがあるとすれば、それは、皆さんそうお思いのように、賃金支払いの場面で、最後に来た、一時間しか働いていない者(たち)にもこの主人が一デナリオンを与えたというところ。なぜそう思うのかといえれば、そこでなされていることは、一般に、人間の判断とか、人間の常識とか、人間の論理や倫理といったものと違ったことだからです。

人間の判断とか、常識とか、論理や倫理といったものをここで代表しているのが朝一番に雇われて、丸一日労働に従事していた人びと、その彼らの言動にほかなりません。彼らはこういって、不満を主人にぶつつけます。

「最後に来たこの連中は、一時間しか働きませんでした。まる一日、暑い中を辛抱して働いたわたしたちと、この連中とを同じ扱いにするとは」(一二節)。

夕方涼しい時、ちょっとだけ、一時間も働いていない。それなのにわれわれと同じ一デナリオンを賃金としてあげるのは不当である。正義に反している、とんでもないことだ。彼らの不満は、私どもにもよく分かります。とくに自分の権利に敏感な現代の私どもには人間的にはたいへんよく分かることです。アルバイトをしながら学ん

でいる学生たち、いまの若い人たちは、毎日こうしたことで頭をつかわざるをえない現状にあります。

ところで彼ら朝から働いている人たちのそうした主張は、最後に来た、まさにあの連中に「比べて」自分たちが正當に扱われていないということです。しかし主人は彼らとの関わりにおいては、決して不正なことをしたわけではありませんでした。ですから、こういつています。

「友よ、あなたに不当なことはしていない。あなたはわたしと一デナリオンの約束をしたではないか。自分の分を受け取って帰りなさい」(二三―一四節)。

その上で、次のようにいいます。

わたしはこの最後の者にも、あなたと同じように支払ってやりたいのだ。自分のものを自分のしたいようにしては、いけないのか。それとも、わたしの気前よさをねたむのか」(二四―一五節)。

こうしたやりとりを見ると、問題は、最後に来た者たちをどのように見るか、どのように受け入れるかということであったことは明らかです。まさにこの点で、最初から働いていた者たちと、この主人とでは、まったく違っていったということではないでしょうか。

朝早くから働いた人たちの不満は、最後に来た人たちと「比べて」自分たちの扱いが不当だということにあったと申しました。しかしもし「比べて」というならこう考えることはできないのでしょうか。最初から働くことのできた人は、雇われることをずっと待たざるをえなかった人たちと比べて、少なくとも夜明けと同時に、失業への不安から解放されていました。失業者がつねに存在した時代であるなら、このことは小さなことではない。彼らは長い時間を無為に、いや不安と絶望の中で過ごさなければならなかった。家族もいたとすれば、そのあせりはなおさらです。「だれも雇ってくれない」といつていた彼らこそ、むしろ同情されてよい人たちです。さらにいうなら最初に雇われた者たちは、「まる一日、暑い中を辛抱して働いた」といつていまずけれど、これも見方を変えれば、そうすることができたということ、それだけの体力と気力をもち合わせていたということを、むしろ(神に)感謝すべきだといってもよいことです。ここに人の見方とは違う神の見方が、神のまなざしが現れ出ているのです。

3 この最後の者にも

先ほど改めて読んだところ一五節に、「わたしの気前よさをねたむのか」という問いかけがありました。

たしかにこの最後の者(単数)への一デナリオンは、物惜しみしない、度量が大きい

いという意味で「気前よさ」といってよいものです。聖書のもとの言葉は、良いという意味で広く使われている言葉です。神についても用います。慈悲深さ、寛容、善良などの意味です。

この神の憐れみが、人の常識に逆らって示された。「だれも雇ってくれない」と彼は嘆いていました。本当につらい思いが響いています。疎外感と孤独な思いに打ちひしがれています。望みを失いかけている人間のつぶやきがあります。朝から働いている人にとって、そんなことは知ったことではない。自分たちの働きと比べて、主人の評価を要求します。

私どもの社会、そこに生活する私どもも、この最初に雇われた者たちのような見方を、他人ひとに対して、知らず知らずのうちにしていることはないでしょうか。他の人のことなど考えない。相手の立場に立つて考えることをしない。自分ではできる、自分は持っている、それだけが重要であって、同情も寛容も二の次というような考えであり態度です。弱い立場の人を思いやる、助けの手を伸ばすというようなことが後退しています。人と人、国と国の間で、なぜこんなにも他人を思いやる寛容さや憐れみがなくなってしまうのか憂慮せざるをえません。

今日の聖書はそれとは全く別の見方、全く別の生き方の存在することを語っています。イエス・キリストにおいて、その言葉と行動を通してご自身を現した神は、いま申し上げた私どもと違う眼差しをもっておられます。違う行動をなさいます。神はこの主人のように、仕事を求めながら人に遅れをとった者、生活の不安の中にただずむことを余儀なくされた者、そのようにして疎外と孤独に苦しむ者たちに眼を留められます。神は、先頭を走っている者ではなく、最後の者に眼を留められます。そして人はだれも、そのような神の眼差しの中ではじめて、もろもろの現状を抜け出て本当の自分を生きることができるのです。

詩篇六八編（六節）に次のような一節があります。「神は聖なる宮にいます。みなし児の父となり、やもめの訴えを取り上げてくださる。神は孤独な人に身を寄せる家を与え、囚われ人を導き出して清い所に住まわせてくださる」。聖書が証しするのは、そこにあるように、孤独の者、寄る辺ない者に偏って憐れみを示される神です。神は最後の者に偏ってご自分を向けられます。この偏りは不公平だと、今日の朝一番から働いている者たちと口をそろえてわれわれも唱えるのでしょうか。それとも、そのような偏りのゆえに神の憐れみを賛美するのでしょうか。「わたしはこの最後の者にも支払ってやりたいのだ。自分の者を自分のしたいようにしては、いけないのか」と語られる神は、このような憐れみにおいて、最後の者に傾斜している神です。イエスを教会の主・世界の主と信じ告白することは、そうした神の憐れみを知って、これを証しし、神の憐れむその人とともに生きるといふことです。そのために教会は世に存在します。この教会の群れに加わるのに何の資格も条件もありません。朝だけでなく五時にも招きがあります。この招きに感謝をもって応えて、主に従う道とともに歩んでいきたいと思えます。

(二〇一九年二月一七日)